



農×地域キャラバン2025

未来を耕す

～多様な風と土をめぐる～



しんぶん
多岐にわたる



2026年3月

取り組みと成果のまとめ



特定非営利活動法人つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

目次

- P 2 はじめに
- P 3 農×地域キャラバンのねらい
開催概要
- P 4 第1回 南丹市八木町訪問 まとめ
- P 6 八木町訪問の感想：ご参加のみなさんから
- P 7 アンケート3回共通質問の集計
- P 8 第2回 南丹市日吉町訪問 まとめ
- P10 日吉町訪問の感想：ご参加のみなさんから
- P11 農×地域キャラバン チラシ
- P12 第3回 南丹市園部町訪問 まとめ
- P14 園部町訪問の感想：ご参加のみなさんから
- P15 終わりに
関係者の紹介

主催：特定非営利活動法人つむぎ
・農×地域シンポジウム実行委員会

後援：南丹市

この事業は「令和7年度京都府地域交響プロジェクト
交付金」を活用しています。

はじめに

今年度で4回目となる「農×地域 未来を耕す」の取り組みは、“農”を切り口に、地域住民や移住を希望している人などが、課題や経験を共有し、多様で持続可能な地域の在り方を模索する場です。

南丹市に限らず、日本各地の中山間地では、長い年月をかけて培われてきた農の営みや、里山、農村環境を維持していくことが難しくなっています。高齢化や少子化、都市部への人口流出などによる担い手の急激な減少が大きな要因ですが、中山間地における「持続可能」な地域の在り方を考えれば考えるほど、複雑に問題がからみあい、それらを切り分けて個別に取り組んでいては、持続する姿にたどり着けないという事がわかります。

移住者や関係人口を含めた多様で幅の広い“担い手”を増やしていくこと、分野を超えて協働することなど、必要とされる取り組みや体制を構築しなければなりません。

「農×地域 未来を耕す」では、都市と農村など異なる環境に暮らす人々や、農家と消費者、行政や市民団体など、多様な立場や考え方を持つ人たちが、お互いを知り、活発に意見を交換する場を作ってきました。この冊子で、地域の農の現場を訪ねた今回の農×地域キャラバンを振り返りながら、新たにつむがれた学びと交流をみなさまと共有したいと思います。

未来を耕す

豊かな森、田畑、里山の暮らしが息づくこの南丹。
5年後、10年後、そしてその先、
どんな風景にしていきたいですか。
地域の人も、移り住む人も、訪れる人も、
農と地域について一緒に考えてみませんか。



農×地域キャラバンのねらい

農×地域キャラバン実行委員長 鈴木 健太郎／369商店

農作物を生産者から直接買い付けて販売している者として、現場を訪れることの大切さは常に感じている。例えば料理人を畑に案内すると、翌週からその訪問した農家さんの野菜に対する注文は必ず増える。人と現場に触れることで理解が深まる、というよりも、正確には共感性が上がっているのだと思う。

過去三年に渡り、様々な角度から地域と農業について考え、話し合ってきたこの取り組みについても、同じことが言える。「農×地域」シリーズの大きなテーマのひとつとして、「移住者×地元」、「オーガニック×慣行」の対比があったと思うが、この対比は現場から離れたところで話し合ったところで、理解は深まるかもしれないが、共感性はそこまで上がらない。

この溝を埋めるにはやはり、現場を訪れて、農地の規模や周囲の環境に触れ、生産者自身の口からそれぞれの農業や地域に対する想いを聞くべきである、というのが、今回「農×地域キャラバン」という企画に至った思いである。

農業と地域社会は切っても切れない関係にある。その担い手である住民が、出自や価値観で分断されていることは今後の農村地域全体を考えるうえで非常に大きな課題である。この溝を埋めて、より包含的で発展的な未来像を描くことがこの取り組みの目的であり、そのためにできるだけ多様な現場を見て回るということを今回の「農×地域キャラバン」の大きなねらいとした。

つくりに
会いに行こう！



開催概要

2025年11月に合計3回で開催した農×地域キャラバンの各訪問地とそれぞれのテーマは以下の通りです。

第1回11月2日（日）新たな土地で種をまく

農×移住でつむぐ生業と暮らしの実践



訪問先：南丹市八木町

京十草ビラ 須賀 智昭 さん

こはまファミリー農園 小濱 達郎 さん

大川農園 大川 倫正 さん

<昼食>
古民家食処
「美・火水」



地域のニーズや資源を活かした地域循環の視点

第2回11月24日（月・祝）ここにある強みを活かす

訪問先：南丹市日吉町

有限会社日吉ファーム 藤堂 祐士 さん／代表取締役

Yard Reed 芦田 有吾 さん／代表

伊藤農園 伊藤 芳雄 さん

<昼食>
うつわカフェ
Aoisaru

第3回11月29日（土）地域とともに農地を守る

地域連携と集約化で地域の農地を守る



訪問先：南丹市園部町

つつみ農園 堤 博明 さん／代表

株式会社Ryo 西田 良弘 さん／代表取締役

黒田宮農組合 木村 裕 さん／代表

<昼食>
Chezあさひな

南丹市の南の玄関口である八木町には、JR嵯峨野・山陰線と国道9号線が通る開けた住宅地と平野部に広がる農地があり、その中央には田畑を潤す豊かな水量の大堰川が流れています。

神吉地区は、八木町の北に広がる中山間地にあり、美しい里山風景が広がる場所。ハウス栽培での水

菜や水稻の栽培が盛んにおこなわれています。

今回の訪問では、神吉地区に移住し、農に携わる3人を訪ね、農×移住でつむぐ、ナリワイと暮らしの実践から学ぶべく、お話を聞きました。

以下に訪問当日にお聞きした内容のまとめと、参加された学生からの声をまとめます。

京十草ビラ 須賀 智昭さん

【どんな農業をしていますか？】

移住者中心のグループで、情報交換をしながら自然農で米、野菜、花を生産し、販売している。耕作面積は25枚の水田(約10ha)、1/3が野菜。現在、神吉で農業をしているメンバーは4人で、注文を受けて京都市内に配達したり、野菜ボックスを作って販売もしている。1人では品目を集めるのに苦労するが、グループだと出来る。SNSでの注文に応じたり、畑での直売を実践しているメンバーもいる。

【草ビラの仲間たち】

農業を始めるために移住してきたり、草ビラの活動がきっかけで移住したり、福祉の仕事をしているメンバーも。地元の農事組合に参加して役員を務め、消防団にも入るなど、地元の方々との協力関係を大切にしている。理容師の仕事をしていたメンバーは、地域の高齢者の方などからの依頼で髪切りに行くことも。ゆくゆくは店舗をかまえても面白いかもと話している。草ビラの活動として、ポッドキャストやスポティファイでラジオ番組を配信している。ここにきた目的はみんな違うが、どういう暮らしがしたいか、自分の中心にしっかり目的があればいいのではないかと。

【これから】

神吉の地域の中から耕作依頼を頂く農地が多くなり、面積が増加してきているので、さらに広げていきたい。神吉はよいところで、この景観も大事にしたい思いもある。できる範囲で関わりたい。

神吉地区 区長 家垣 幸弘さん

※交流会にご参加

皆さんが神吉地区に興味を持って来てくださったことを、地元で生まれ育った者として、うれしく思っています。神吉地区はバスが一日に数本しか通らないような不便なところですが、地元の者には、これが普通なので、不便なこと工夫してやってきました。街の方には不便と感じられることでも、不便を楽しめるようになるとよいと思っています。そのために、この地で暮らすのなら覚悟をしてきてほしいということをお話ししました。地域の良いところばかりをアピールしても、実際に暮らしてみたら「こんなはず



こはまファミリー農園 小濱 達郎さん

【どんな農業をしていますか？】

自給自足のくらしをめざしながら今日に至っている。90aの水田で耕作中。来年は全体で1.7haの耕作を予定している。今年は40a分の乾燥を天日干し(稲木干し)にし、収量は約100袋。なかなかの作業だった。出荷先の開拓が必要。今まで農薬を使ったことはなかったが、今年は初めて一部の田んぼで除草剤を使用した。地区全体での防除が一斉に行われる。自分のところは除外してもらうことが出来ている。

農機具はトラクター、コンバイン、田植機、乾燥機、バインダー、ハーベスターなど。近所の方に倉庫を借りて保管している。譲り受けた機械など古いものが多いが、自力でメンテナンスをしている。

【神吉での暮らし】

高槻から移住してきて9年。炊事、風呂の燃料は薪で、補助的にカセットコンロを使用。水は山水を緩速濾過装置を使って利用。

「じゃなかった」となると、定住とはならず、何より気の毒です。移住してきた人と元から暮らしている人との差がなく、田舎の良さを生かした暮らしができることが理想です。従来の農業、自然農法など色々な農業のやり方や良さがああります。農業や山のことなどについて、子どもたちに、ものづくりのノウハウを伝えておくことが大切なことだと思っています。

大川農園 大川 倫正 さん

【どんな農業をしていますか？】

2012年から神吉で研修に入り、2014年から就農、九条ネギと水菜の栽培を開始。研修は慣行農法だったが、有機に転換。ネギは無農薬では難しいので水菜に絞った。



水路のメンテナンスは必要だが、使い放題。洗濯、畑の水やり、夏はプールの水にも。上水道と使い分けて活用。トイレはコンポストトイレで、自らの排泄物も時間をかけて大地へ還す取り組みを継続している。電気はソーラーパネルとバッテリーで自家発電。オフグリッドは行っておらず、買電と併用している。（月に600円～3,000円程度）

移住当初3人だった子どもは現在5人に増え、一番上の子はこの春で高校生に。いくら大きな声を出しても怒られない環境で、地域に見守られながら育っている。ご近所とは積極的に挨拶を行うようにして、心地よい人間関係の中で暮らせている。保育園は送迎があるのでありがたいが、学校までの距離は遠く、送り迎えの際には車が必須。

【これから】

狩猟免許を取得し、これまでに100頭以上の鹿、猪などを捕獲。地元の猟友会に入り、有害鳥獣捕獲も。現在は自家消費のためにジビエの解体を行っているが、今後、ジビエの販売に向けて施設整備ができればと考えている。



幅6m×奥行22mのハウスが11棟あり、7棟を稼働中。1棟を家庭菜園にしてみたが、手入れができず（水菜に時間を取られ）、放置気味。

栽培している水菜は主に生食用のサラダ水菜で、柔らかいものができるよう、また、化学肥料や農薬を使用せずに美味しく、環境にもやさしいものをと努力している。農協には京みず菜のブランドで出荷。中央卸売市場を通して関東地方にも出回っている。

【難しいこと、工夫していること】

出荷調整は1袋200g（4～18株）、それ以下でも以上でもダメ。1箱20袋の出荷。農協に出荷するものは京みず菜のパッケージで、ブランド力があり、首都圏の百貨店からの引き合いもある。長くなりすぎると袋に入れた時に折り返しが多くなりすぎて規格外になるが、成育は夏季と冬季では大きく異なる。夏は25日程度で収穫できるが、冬は2～3ヶ月ほどかかる。また、冬季は気温が－4℃以下になり凍結が起ることも。

ダイコンサルハムシなどの病害虫の防除は化学的方法ではなく物理的方法で虫をハウスの中に入れないための出入り口の防虫対策も大事になる。夏場にカキ殻石灰、油粕、米糠などを投入後、すき込んで発酵を促し、ハウス内の高温を利用して土中温度を上げ虫の卵や草の種を減らすようにしている。

【農業への想い】

元公務員で、自分の中にあつた社会を良くする事に直接つながる仕事をしたいとの思いから、府の担い手養成実践農場の制度を利用して就農した。八木町内から毎日通って営農している。妻と大学生、高校生の子どもの4人家族。

学生からの声

（龍谷大学経済学部 長谷 颯真 さんレポートより抜粋）

...京十草ビラはネットワークと地域の方々と協力しイベントを行うことで関係を育み、こはまファミリー農園は暮らしの多角化で強さをつくり、大川農園は緻密な設計と地域循環で安定した出荷を実現していました。私は、移住が仕事をもらう行為ではなく、地域資源の読み替えと組み合わせによって仕事を自ら編み直す過程であることを学びました。...

...大学の学びに引きつけられ、これらの小規模な取り組みは周辺的な存在ではなく、地域経済のレジリエンスを高める重要な仕組みです。...

当日は、移住希望者や農家の方、地域住民など多様な参加者が集まり、移動の車内や訪問先での質疑応答も活発でした。住宅や保育、獣害、物流コスト、販路の安定化など、農の外側にある課題が多いことも共有され、地域ぐるみの連携が不可欠だと感じました。

八木町訪問の感想

ご参加の
みなさんから

各訪問先で最も印象に残ったことは何ですか。ご感想をお聞かせください。

訪問地①京十草ピラ

- ・こういった地域で、お金が目的ではなく生きるということを実感し、暮らしを目的とされているという話を聞いて、これから私が社会にでた時に、とてもためになる話だった。
- ・自然栽培とは言わず、お米を販売しているというお話は驚きました。グループで動かれているのは素敵ですね。1人より皆で協力しあえるのでうらやましいと思いました。
- ・有機農業を実践している点。グループ内で協力している点。移住している人の意見は参考となった。
- ・オーガニックの人達で協力してネットワークを作っていることが最も印象に残りました。また、農事組合など、農家と地域の運営は切っても切り離せないことなんだと感じました。
- ・自然農に関心があったので、お話が聞けてありがたかったです。「暮らし」を重視している」というところが印象に残りました。

訪問地③大川農園

- ・大川さんのお話の中で、「公務員をこのまま続けていて社会のためになるのか」という疑問を持ち、無農薬で環境に良い農業をしたいという話が印象に残った。
- ・水菜の種まきから収穫まで見せて頂き、分かりやすかったです。虫食いで出荷できない物も多いのはびっくり。購入者の考え方がわかり、虫食いででも買ってもらえる世になると嬉しいですね
- ・成育を管理している点(計画的に農業している所)
- ・みず菜に特化した農園経営。自然の変化に合わせた工夫と苦労のお話を伺いました。
- ・水菜は成長は早い。夏と冬では成長が違うこと。
- ・とても分かりやすく、楽しいお話でした。大川さんのお人柄が表れた美しい水菜でした。

訪問地②こはまファミリー農園

- ・家族で自給自足をし、子どもたちがのびのびと過ごされているという話を聞き、とてもすばらしい生活だと思った。
- ・子どもさんを育てながら楽しそうな生活がいいなあと思いました。平飼い養鶏と狩猟に興味あります。(オリではなく、ワナで取られているのが知れて良かった)
- ・色々な事に取りくんでいる点。自然の中で子ども達を育てている所(孫が2人いるので娘夫婦も参考になります)
- ・やりたいと思ったことを片端からやっていること。すごくオープンで、地域の方も安心して関わってほしいなと思いました。
- ・まさに「理想の暮らし」を体現されていると思いました。素敵なファミリーでした。



本日全体を通してのご感想などありましたらご自由にご記入ください。

- ・今日一日を通し、移住者と元から過ごされている方たちとの意識の差などを学ぶことができ、将来こういった生活に対するあこがれを感じることができた。
- ・現場をみせて頂いたのはとても良かったです。お弁当、とてもおいしかったです。
- ・初めての参加でしたが、大変勉強になりました。個々知りたいことがあるので、今後の企画にも参加したい。
- ・京都に、こんなにも美しい場所があるのかと、驚きました。感動しました。土地の人達が、心底、この土地を守り、繋いでいきたいという熱意を感じまし

- た。多様なお話を聴かせていただけて、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・都会の生活に慣れきってしまうと、「こうでないと駄目」とか「これがあると便利だから最良」と”便利か不便か”だけを基準にした選び方しか出来なかった。その結果迷いやためらいしかなかった。本日このイベントに参加して思ったのは「人が住んでいるかぎり、その場所に生きる為の工夫がある」を知ることが出来る貴重な体験となりました。
- ・農や地域について考える良い機会をいただきました。ありがとうございました。

アンケート3回共通質問の集計

ご参加の
みなさんから

質問①この企画についてどこで知りましたか。 (複数回答可)

- この企画のチラシ 【7】
- つむぎホームページ 【0】
- 知人からの紹介 【7】
- 農×地域シンポジウムからのメール 【7】
- SNS上の情報(Facebookなど) 【1】
- 移住者向け情報メール(南丹市) 【3】
- 移住関連情報サイト「今日と明日」(京都府) 【2】
- その他 【7】
 - ・大学のゼミでの活動の一環
 - ・スマウト(移住のマッチングサイト)
 - ・各地の自治体役場の移住関連の資料
 - ・つむぎからの紹介



質問②ご参加のきっかけは何ですか。(複数回答可)

- 地域の課題に関心がある 【14】
- 地域の課題に取り組んでいる 【1】
- 南丹市を含め、地方移住を検討している 【1】
- 農や地域のことに関心を持っている人
たちとつながりをつくりたい 【10】

- 農業に関心がある 【20】
- 就農を検討している 【2】
- 自給農をしたい 【6】
- 農業に携わっている 【4】

- その他 【3】
 - ・ゼミでこのイベントの存在を知り、移住者と元から住んでいる人とのつながりなどを学べるとのことで興味を持ち参加した。
 - ・農業、木材加工など複合的に取りくみたい。
 - ・自然の中でゆったりと、それでいて自分が生きる為に必要な物(食物、野菜)を作りながら日々生きていきたい。

質問③今後、「多様な農」や「農×移住」のテーマに関連し、どんな企画があるとよいと思いますか。 (複数回答可)

- 農地付きのお試し移住 【7】
- 定期的に通える農体験や援農先の情報 【12】
- 新規就農するための実践的な講座 【10】
- 新規就農したい人達との交流会 【11】
- 地域の農家や農業関連の担当者(地域の“農”とつながてくれる人)と出会う機会 【13】

- その他 【3】
 - ・中山間地域のことを知れる企画…でしょうか。
 - ・自分で種とりをされている農家さんがあるようでしたら、ぜひ見学・タネとり体験させてほしいです。
 - ・牛耕を知っている方に会えないでしょうか？やってみたい！！



世木地区、五ヶ荘地区、胡麻郷地区の3つの地区からなる日吉町は、日吉ダムや、温泉施設もあり、京の伝統野菜である壬生菜(みぶな)の産地としても知られています。

今回訪問した胡麻郷地区は、標高が約200mと高く、日本海に流れる由良川水系と太平洋に流れる桂川水系の分岐点となる分水界が複数箇所あります。

水源に近い、特に農業用水はため池などで確保されてきた貴重な資源となっています。戦後の入植・開拓で畜産業も地域の産業として根付き、山に囲まれていながら平坦な農地も比較的多く、若い世代の新規就農者も増えています。

訪問では、農を通して胡麻地域のニーズや資源を活かし、地域循環を生み出す取り組みを学びました。

有限会社日吉ファーム 藤堂 祐士さん

【どんな農業をしていますか？】

日吉町胡麻と京丹波町に2か所の施設があり、交配、分娩、哺育、育成、肥育と細かくステージを分けて、約11,000頭の豚を飼養・管理している。

豚肉の味は50%が血統、残りが環境と餌と言われている。飼育しているのは、血統としては、大ヨークシャー種とランドレース種を掛け合わせた雌にデュロック種の雄とを交配させた三元豚で、体が丈夫だったり子育てが上手な品種と、肉質や味がよい品種を掛け合わせたブランド豚。

この地で養豚をするにあたり、京都のブランド力を生かしたいと考えた。現在、餌も含めた飼育条件を満たし、品質の基準をクリアした豚が京都ポークと認定されており、さらに、日吉ファームで肥育された豚は京丹波高原豚としてブランド化に成功している。

餌にパンを混ぜると程よくサシが入った柔らかい肉になることから、餌には一定のパンか大麦を加えている。パンなどは、食品残渣の再利用で、再処理をすることで飼料として有効利用しているもの。

【苦労していること】

養豚には、洗浄に水をたくさん使うけれど中山間地の胡麻地域は水が少ないこと。浄化槽で処理してから川に戻している。

温暖化の影響もあり、気温が高くなると食欲がなくなり、種付けもうまいかない。水が少ないので水を使って冷やすことが出来ず、電気ですくすく風を起こすしかできない。また、機械類は粉塵ですぐ故障する。

【工夫していること】

母豚1頭から1回に子豚が16頭程度生まれるが、実



際哺乳できる子豚は、10頭程度になる。環境面では、豚が気持ちよく過ごせるように温度管理に気を配るよう従業員に指示しており、それぞれの部門に専門の担当者を配置し、毎朝の朝礼で情報共有をしている。

【地域とのつながり】

日吉ファームでは、日吉豚舎の排泄物をおがくず、木くず、菌床などと混ぜ、発酵させて堆肥をつくっており、堆肥は誰でも無料で持っていけるようにしている。堆肥を作ることが経営の事業ではないので無料で提供しており、大量に欲しいという場合にはトラック配送料を受けとり、配達することもしている。

胡麻地域の有機農業グループに毎年完熟堆肥を提供するなど、地域資源の循環、環境保全型農業の推進をサポートしている。



学生からの声

(龍谷大学経済学部 井脇 劉さん
レポートより抜粋)

…この三か所を訪れて特に感じたことは、同じ地域で農業をしているでも一人一人考え方が違い、いろいろな農業形態があるということです。その中でも、この日吉町の地域資源を守っていき、それを活用しながら発展を望んでいるというのが共通し

ているのかなと感じました。

日吉ファームは京都ポークを中心に日吉町の魅力を全国に伝え、Yard Reedでは地域の方とのつながりを大事にしている、伊藤農園は無農薬という安心安全の野菜を作っている、というそれぞれがそれぞれの考えで独自の農業を行っているのが面白かったです。

Yard Reed 芦田 有吾 さん

【どんな農業をしていますか？】

新規就農2年目。父が農業をしていたがすでに離農しており、実質的にほぼ農地ゼロから営農を開始。50aから始め、現在は1.4haまで規模拡大した。露地野菜を中心に、水稻も作付。年間約20品目を有機栽培 約6割／減農薬 約4割で栽培している。

播種・育苗は自家で実施、種は地域にある古くからの種苗店から入手しており、お店のオーナーさんにはいつも相談し、助言をもらっている。

夏野菜の管理期と冬野菜の作業期が重なりやすく、冬野菜を優先して作業する方針。キャベツ、ソラマメ、ブロッコリー、ミニトマト、ナス、万願寺唐辛子などに加え、この辺りでは珍しい品種のロマネスコや栽培が盛んな黒大豆も手掛けている。

【地域とのつながり】

地元とのつながりを大切にし、情報収集や関係づくりを継続してはいるものの、一方で自分がしっかりと稼げて家族を養うことが出来る、食べていけるようになるのが目標。「地域にかかわらないとあかん」と思いすぎない、関わりに引っ張られ過ぎないようにバランスにも留意している。ここで農業をやっているだけで、地元貢献になっていると思う。



伊藤農園 伊藤 芳雄 さん

【どんな農業をしていますか？】

有機農家として就農して43年。露地のみで有機野菜を栽培している。現在使っている農地の土壌は黒ボク土。農地は借地のみで約1ha規模だったが、地主から返却依頼があり、その分を返却して現在は約60a規模を1人で耕している。投入するたい肥は、日吉ファームの堆肥のみ。

地域に適した野菜づくりを志向し、夏と秋で20種類くらいの野菜を栽培。無農薬・有機野菜を中心に産直をしている共同購入グループに納品している。

愛農学園農業高等学校の先生の影響を受け、有機栽培を志すようになった。もともと花が好きで、コスモスとポピーなど、畑の端に花畑も設けている。

主な作付品目は、リーキ、ネギ、ニラ、ジャガイモ、ダイコン、タマネギ、また、オクラ、万願寺唐辛子、ゴーヤなども栽培している。

【工夫しているところ】

日吉ファームの豚糞たい肥や近所の谷口牧場の牛糞、近くに工場がある山田製油（ごま油工場）の圧搾油かすなど、地域の資源を肥料として活用している。

マルチは使用せず（マルチャー未保有）、代替として豚糞をマルチ代わりに敷く工夫をしている。元水田が多く、圃場ごとに土質差があるため、たい肥やもみ殻などを相当量投入し、土づくりを強化している。元肥としては、牛糞・豚糞・鶏糞、油かす、米ぬか、石灰などを使用。風土に合った野菜を作ることを大切にしている。

出荷団体の農家と月1回のミーティングに参加し、現場の課題共有を行っている。

【苦労しているところ】

重量野菜（キャベツ、ハクサイ等）に取り組む周辺農家が少なく、助言や知見の共有が得にくい。普及員の人でも情報を持っていないことがあり、AI等も活用して学習している。SNSで質問することもあるが、栽培環境が異なるため、参考にしづらいことが多い。毎年試行錯誤が前提。病害発生によりブロッコリー・キャベツの収穫が危うくなることもある。

大きな課題として、シカ被害が多い。獣害対策としてワイヤーメッシュ設置を申請しており、追加の工夫として、音楽を流す対策などもしているが、被害にあうこともある。



【工夫していること】

夏の暑い時期にマルチで畝を完全にカバーし、草の種や虫を高温で排除する太陽熱処理を約2か月実施している。

【苦労していること】

新たに借りた圃場でハウレンソウを播種したが、排水不良でうまくいかなかった。

各訪問先で最も印象に残ったことは何ですか。ご感想をお聞かせください。

訪問先①有限会社日吉ファーム

- ・地域の農業に、とても深く関わられている事に感銘を受けました。三元豚が日吉で作られている事も誇りに思います。
- ・地元で手に入るものをうまく活用されて、大規模な経営をされていることを知れてよかったです。
- ・会社組織で一貫生産をしている所。ブランド化(京都ポーク)に対応して、種も検討(開発)している所。
- ・三元豚が3種類の豚の交配で作られていた事を初めて知りました。エサや衛生管理で豚舎のイメージが変わりました。堆肥も地域の農家さんで使われており、地域に根ざした事業をされていると感じました。
- ・養豚業についていろいろと教えていただき、ありがたかったです。様々なご苦労があることが分かりました。企業としての地域貢献も素晴らしいと思いました。
- ・いつもおいしくいただいている豚の生産をされている方に直接お会いすることができた(なかなかない機会)。気になっていた排せつ物の成分について誠実に答えていただき感謝します!!地域の中で肥料として最後まで使われていることにちょっと感動しました。
- ・中山間地域で豚を育てることの難しさとして、養豚には水がたくさん必要なので水を引いてきて、その水をまた浄化して返すという二次的な難しさがあることが学べた。
- ・堆肥を無料で農家の方に使ってもらっていて、地域の方と一体となって農業をやっておられると思った。
- ・堆肥を無償で、しかも地域の人以外の方にも提供している事が最も印象に残りました。自分にとって不必要な副産物を地域に還元する良い例だと感じました。

訪問先②Yard Reed

- ・苦労をされているのに、そのことを感じさせない明るさと前向きさ。
- ・駆け出し農家さんとして奮闘されている姿を見て、これからずっと応援したいと思いました!
- ・地元生まれ育ちであっても、やっておられる農業が一から自らの経験を重ねていかなければならないのが大変ですが、やる気に満ちておられる感じがして、若手の農家さんに知り合えたのもうれしかった。
- ・「レゲエと枝雀が育てた野菜」お弁当のキャベツはとてもおいしかったです。営農していくことは、覚悟が必要だと感じました。
- ・試行錯誤しながら農業をされていて、とても興味深く、また、生活の基盤づくりを優先すると決めたということに、共感できた。
- ・肥料や種はネットで買う方がポイントが付きお得だが、地域の人から直接買うことで地域の方同士でのいろんな情報や信頼なども作れてポイント以上に良いところがあるということに感心しました。
- ・畑ごとに性質が異なるので、土とのコミュニケーションが大切だと話されていて、畑を観察することが大切だと思った。
- ・自分で作った野菜を積極的に周りに営業をかけることで、自分の作った野菜を感想という形でフィードバックしているという話がとても面白かったです。

訪問先③伊藤農園

- ・40年も一人で無農薬で作られているのには頭が下がるばかりです。
- ・いろんな野菜を作っていて無農薬という農法を広い畑で基本1人で作業しているということに驚いた。
- ・有機農業も種や廃棄処分にお金がかかるので大変と思った。それでも無農薬で栽培されておられるのが嬉しいです。
- ・有機、無農薬を貫いてこられたことは尊いことだと感じました。
- ・まず、生業となる農業を、ずっと畑の土地を借りていらっしゃるということに正直驚きましたが、そういうやり方もあるのだなと、もしかして今日一番の収穫かもしれないと思った。
- ・まず、約6反ほどの土地を有機無農薬で栽培されていることに驚きました。また、イチゴを無農薬で栽培していた話を聞いたことも良かったです。



本日全体を通してのご感想などありましたらご自由にご記入ください。

- ・地域の農に携わられている方を具体的に知ることができました。これからはもっと地域に関わっていけたらと思いました。
- ・非常に貴重な機会をいただきました。農家の方と話をする機会などないのでよかったです。
- ・大変、参考になりました。農業の現実、地域貢献(人とのつながり)など勉強になりました。
- ・中山間地域の現状をもう少し知ることができればありがたい。
- ・農家さんの大変さがよくわかりました。又、地域に根ざした農業をがんばっておられる皆さんに脱帽です。参加の皆さんと交流できて良かったです。
- ・3人の地域の方のお話を聞いて、それぞれの考え方があり、全部納得できました。
- ・農家の方にいろいろなお話を聞いて、農業に関する知識が増えたと、地域のために何かしたいという思いが感じることができました。

南丹市の中心地域として市役所や商業施設が集まる園部町には、旧園部藩の歴史が残り、日本で一番古い天満宮である生身天満宮や、自然豊かな温泉施設として人気のり溪温泉などがあります。

中心部から少し離れると田園風景が広がり、昔からお米作りが盛んで、京野菜の生産地としても知られています。

つつみ農園 堤 博明さん

【どんな農業をしていますか？】

脱サラして妻の実家で農家を始めて約12年、約8haをてがけている。お米は生業では難しいと思ったので畑を主にしてきた。黒枝豆、トマト、とうがらしなどの果菜類や、さつまいも、イタリアのミニトマト色とりどりの8種類、ハウス春菊、にんにく、白大豆、小豆を栽培し、黒豆は1町ほどを12から2月手作業で対応している。

今年は米の価格が上がったので、稲作を2町くらい始めた。酒米(山田錦)も、CO²低減で水を張らずに試験的に栽培し、効果が出てきている。

法人組織ではなく、個人事業主で、農事組合法人の理事長もしている。妻の親、息子も別経営体で農家。慣行農法をしているが、有機農業研究会のつながりがあり、BLOF理論も学んだ。有機農業は目指すところであるがすべては難しい。化成肥料はほとんど使わず、汚泥発酵肥料やバイオスティミュラントを取り入れ、収穫体験の野菜は有機にするなど、棲み分けをしている。大切なのは土づくり。

【工夫していること】

作物のブランド化が出来れば強い。ブランド産品にしてJAに出荷しており、園部の道の駅新光悦村で販売する際は、つつみ農園のラベルをつけ、信頼を勝ち取りよく売れるようになった。

就農支援の補助金は全て農業機械に投資し、5年間で機械をそろえ、現在、トラクターは8台所有している。エアコン付きでエヴァンゲリオン仕様のかわいいトラクターは子どもに夢を与えるための工夫。

南丹市に限らず、日本各地の多くの地域とも共通する課題として、農業従事者の高齢化や後継者不足があります。農地を守る様々な取り組みが各地で展開されている中、今回の訪問では、地域連携や農地の集約化、また法人設立などを通して、課題解決の糸口を見いだそうと取り組んでいる方々を訪ね、お話を伺いました。

【苦労していること】

農地を守るために面積を増やす中、有機を減らして慣行を増やすという話も聞いている。経営についても夏の暑さ、水害、病気、虫などの被害で最終的に手に残るまでにかかり減ってしまうところが難しい。規模拡大して売り上げを増やしても所得はあまり増えないということもあり、また、土地を借りてほしいという話の時、条件の悪い土地(水利、草刈の広さ)も一緒についてくることもよくある。

【これから】

南丹市の資源として、農業を打ち出すことが出来ると思うが、どう打ち出していくか。丹波篠山のブランド戦略があるが、山でつながっており一帯が丹波といえる。農業で発展していけるというアピールができるはず。移住促進に関しては地域振興、農業は農業推進課と縦割りにせず取り組む必要がある。山も守っていかないといけないし、林業も重要で取り組んでいかなくてはならない。

新規就農希望者のために、収入の試算があるといいのではと思っている。栗の木何本植えればこれくらいの収入など。



学生からの声

(龍谷大学経済学部 西村 優一さんレポートより抜粋)

…つつみ農園の堤さんには農業で地域を盛り上げようとする取り組みについてお話を聞き、株式会社Ryoの西田さんから大型の農業機械を持ってもらえるのでそういったものが必要な方を助けに行っておられることのお話を聞いたり、黒田宮農組合の方たちにはその地域をまとめて組合として協力して農業をしておられることについてお話を聞くことができました。

虫や病気をなくすために農薬を使うと考えるが

(つつみ農園では)虫が来なくなった、病気がなくなったとなれば農薬を使う必要はないという逆の考え方をされているので、逆の発想を持ったり、柔軟な考えをすることが大切だと思いました。また、農地を守るという点で管理が大変な農地も所有している人の代わりに草刈りをしたりしているそうで、地域の人や土地のために行動されていて地域との関係を大切にされていると思いました。

株式会社 Ryo 西田 良弘 さん

【どんな農業をしていますか？】

父の残した自己所有農地7反で週末農業をするつもりが、借りていた農地4haの返却を断られたことで仕事を辞めて就農。その後毎年頼まれる農地が増え続けて、現在25haで生産、さらに20haで作業委託を受けている。水稻が主で、秋から翌年6月にかけてはニンニクも栽培。稲の品種は6品種。作業分散できるように、早生～晩生までの品種を取り揃えており、人気の品種、高温耐性がある品種、周辺で多くつくられている品種などでそれぞれ生産量を調整している。直播も実験的にやっている。技術が確立すれば省力化につながる。

初めから株式会社として始め、従業員は2名。引き続き機械も含め、コンバイン、トラクター、田植え機、乾燥機4台をそろえ、ライスセンターも運営している。



【工夫していること】

1年目は大失敗で赤字。翌年からはいろいろ工夫しながら、近所の人にも教わりながら少しずつ黒字に。10年分の事業計画をたてて、その通りやった。もみ殻が50トン出るので、一部を八木バイオエコロジーセンターに引き取ってもらい、固形燃料（薪替わり）に加工したり、粉碎して苗土にしたりしているが、軽いので覆土は購入する必要あり。

にんにくは手作業で手間がかかるが、獣害が少なく、春～秋のお米の繁忙期と重ならないメリットがある。条件の悪いところも引き受ける際に、水利が悪いところではにんにく栽培にあてている（1ha）。

【苦労していること】

10年やっても毎日勉強。獣害対策では、年間400枚のワイヤーメッシュを補修する。イノシシは畔を壊すので補修したり作業が多い。

【これから】

土地を無償で借りるところか地主が管理料を払ってやってもらう時代になっている。機械が壊れたら続けられず、「お願いします」というところは多い。頼まれたら引き受けているが、1～2haのまとまった土地であること、大きな機械が入る間口、積載車の駐車場所が確保できるなどの条件がある。集約目標は100ha。近所の人との雑談、情報交換など農作業以外のつながりも大事。競い合う気はなく、かくさない。

黒田営農組合 木村 裕 さん

【どんな農業をしていますか？】

任意団体として昭和53年に営農組合をスタート。30数年間の実績と蓄えをもとに平成22年（2010年）に法人化。農業用倉庫を建て、大型機械（大型トラクター、コンバイン、田植え機）を共同で使えるようにし、各自で機械をもたなくてもよいようにしてきた。

黒田区60数軒のうち、約8割が農家で、営農組合には43軒が加入している。組合員で米、大豆、小豆などを育て、出荷・販売しているが、「荒廃地を出さない」ことを使命として農地の活用、経営を続けている。

【工夫していること】

草刈り作業は月に1回。獣害フェンスの補修なども実施しており、一斉作業には10～20人ほどが参加する。区の役員会には必ず営農組合長が出席し、逆に営農組合役員会には区長も入ってもらうようにしているため、黒田区の取り組みと常にリンクできている。

移住で来た方にも小豆の収穫に参加してもらうなど、組合員でなくても参加できる開かれた組織にし、これらの作業には作業料をお支払いもしている。

毎年11月には組合と区の主催で収穫祭をし、地区の住民にも参加してもらい、収穫した枝豆や各農家からの農産物のおすそ分けなどを皆で楽しむ時間をもって

いる。楽しいという事がとても大事。

【苦労していること】

水管理、獣害対策も共同で実施しているがサルはまだ来ていないことは幸い。シカ・イノシシの被害はひどい。

【これから】

組合員数の変化は少ないが、現在は70代がメインとなるなど、高齢化している中でどう先につないでいくのかという課題がある。園部には農事組合法人が6団体あり、地域に根付いて農地を守っているが、その頑張りで集落機能が維持できている。

息子世代が仕事で忙しく、作業にあまりこれなかったとしても、来られるときに来やすいようにしたり、役員にも30～40代の人にも入ってもらうなど、組合活動に参加しやすい環境づくりを模索している。



各訪問先で最も印象に残ったことは何ですか。ご感想をお聞かせください。

訪問地①つつみ農園

- ・農業は8割ぐらいしんどいことだからこそ、お客さんに美味しいなどの言葉を受けるのが嬉しいということ。
- ・南丹市は資源があるのでそれを活用していきたいとおっしゃっていたこと。
- ・経営をきちんと計算されている。その上でさまざまな取組をされている。
- ・情熱をもってやられていることに感銘しました。個人でもこんなにやれるんだとおどろきました。
- ・売り上げ4000万くらいが、一番所得が高いかも知れないということ。作期をずらす多品種栽培。農福連携の実例。
- ・少ない人手で経営を行っていました。収益を上げるための工夫(地域を守るための工夫)をさまざまされていることが分かりました。バランスが大切ですね。
- ・慣行農法と有機の住み分け。最終的に有機を目指すという姿勢。

訪問地②株式会社Ryo

- ・地域の農業者さんとの横のつながりも大事にしているというところ。競い合っているわけではなく助け合っていきたいという考えに感心した。
- ・農業者の人とのつながりを大切に、情報交換をしているとおっしゃっていたこと。
- ・大規模にされていて、いろいろな取組をされている。
- ・親のあとを受けてのこととはいえ、大変な情熱家。その気持の持続をいつまでももちづけて下さい。
- ・いいとこだけでなく、条件のわるいところもあわせてひきうける。就農1年目から法人化していくビジネスセンス。
- ・農業経営について、お金の流れも含めて俯瞰的に大きな視点。農業というものを知ることが出来ました。
- ・毎年3~4ha増えて、事業の規模が拡大しているのに社員3名で、様々なニーズに対応しているのがすごいと思いました。



訪問地③黒田営農組合

- ・効率的な営農を共同で実施しているからこそ長く続けられるんだろうなと感じました。
- ・農業でのつながりをベースにして地域の結束が強まったとおっしゃっていたこと。
- ・地域のことがしっかり考えられているのが素晴らしい。(その裏には)長い蓄積のあることが分かった。
- ・集転からひきつづいて法人化されていること大切にして下さい。また、機会があれば教えて下さい。
- ・圃場整備がされたことの長期的意義を再確認できた。移住者をまきこむ行事。組合と区との関係の多面性。後継者(組合運営)育成の方法。
- ・地域住民の為に組織を作り、農具の管理、めん密な計画性など、とてもシステマティックに行っていた。
- ・地域愛がすばらしいと思いました。こういう地域で暮らしたら安心だなと思います。



本日全体を通してのご感想などありましたらご自由にご記入ください。

- ・今回訪問させて頂いた3人それぞれの環境によって色々な意見があって参考になりました。その中でも皆さん地域を守るという点において共通していたところが素晴らしいことだなと感じました。
- ・普段お話を聞けないような方からお話を聞くことができたので新しい知識ができました。農家さんは地域のつながりが大切だと思いました。
- ・3ヶ所それぞれ、形態は違いますが、特色があったことが発見でした。

- ・農業、農地管理の実態について、都市住民が、少しでも知っていくことの大切さを再確認させていただきました。
- ・3回のイベント参加で、ミクロとマクロの視点から農業を考察でき良かったです。スタッフの方々おつかれさまでした。ありがとうございました。心より感謝いたします。
- ・企業が社会の発展を目指す姿勢と違って、今あるものをどう守るかという姿勢は、今後の日本にとって大切なのではと思いました。

終わりに

農×地域キャラバン実行委員長 鈴木 健太郎／369商店

「農×地域キャラバン」と題して、3回に渡り多様な現場を参加者と共に訪問した。経営規模、組織形態、農法、生産物など、一軒一軒違っていたが、ひとつ共通していることは、それぞれが選んだその農業の形態が、その人にとっての正解だということである。もちろん紆余曲折があって今の形に行きついているだろうし、今後も変わっていくかもしれないが、現場を訪れて直接話を聞いたことで、訪問したメンバーはそれぞれの農業の在り方について納得できたのではないかな。

同じ地域に住んでいても、立場の違いによって見えない事はたくさんある。ひと昔前まで農業を中心に回っていた農村も現代においては各個人が全く違う仕事をしており、たまの共同作業で顔を合わせる程度になっている。そのため、地域課題についての共通認識が薄れているようにも見える。

この地域の大きな課題である「農地を守る」ということについても、作り手の立場から見ると、小さい規模の個人が地域と協力してやっていくのか、大規模化して法人

や組合等の組織を作って取り組むのか、今回の訪問先でも様々な形があり、それぞれの実践から多様な広がりを見ることができた。それは他地域からの参加者だけではなく同じ地域に住む実行委員たちにとっても新たな視点と理解を深める学びであった。

そういう意味で、今回のキャラバンは南丹市の多様な農業の在り方を俯瞰できる貴重な機会だったのではないかな。訪問を受け入れてくださった生産者の皆さんが抱く課題意識は、決してその場所に限定されるものではなく、他地域でも当てはまるはずである。こうした小さな共感の機会を重ねていくことが、地域全体のより良い未来に繋がると信じていたい。

分断が目立つ社会の中で、農村が本来持っていた人と人の繋がりを、新しい価値観も織り交ぜながら改めて編み直していく作業が求められている。

改めて、今回、私たちの訪問を快く受け入れ、貴重な学びと交流の場を提供してくれた作り手のみなさん、地域の皆さんに感謝したい。

関係者の紹介

運営にご協力いただいた皆さま

南丹市八木町神吉地区

区長 家垣 幸弘 さん

龍谷大学 経済学部 農業・資源経済学ゼミ

<担当教授> 西川 芳昭 さん

<学生参加・レポートとりまとめ>

井脇 劉 さん 西村 優一 さん

長谷 颯真 さん

チラシデザイン&イラスト

uma studio

農×地域シンポジウム実行委員会

牛尾 直美

塩貝 孝之

鈴木 健太郎

高屋 皓

友前 尚子

ドワイヤー はづき

中野 修

堀 悦雄

湯浅 友喜



特定非営利活動法人つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

この冊子および「農×地域 未来を耕す」に関するお問合せ

Email: nantanmiraitagayasu@gmail.com

HP: <https://tsumugi-kyoto.net/>



この冊子は特定非営利活動法人つむぎHPよりダウンロード（PDF）できます。



つむぎHP

この事業は「令和7年度京都府地域交響プロジェクト交付金」を活用しています。

